

技術・家庭科における評価について

— メッセージカード・相互評価を取り入れた実践 —

柳原 弘典

The Evaluation in Industrial Arts and Homemaking

-A practice with the message card and the mutual evaluation-

Hironori YANAGIHARA

Abstract. This research tried to find an appropriate way to raise students' three basic abilities that were held up in Shinonome Junior High School.

In this research, we adopted the following practice as a method of raising students' "ability of recognizing other senses of value."

Students evaluated their works each other, made message cards, and exchanged them in order to understand other students' works. As a result of this practice, we found that the students became to have a conscious to develop their abilities each other.

Key words : self evaluation, mutual evaluation, message card

I. はじめに（本校のめざす生徒像と技術科の関連）

本校のめざす生徒像として「自分を見失わずに異なる価値観を受容し、情報を活用しながら他者とのコミュニケーションを積極的に展開でき、よりよい意志決定をめざし、想像しようとする人間像」と考えた。また、そのための基礎・基本として、「多元的価値観を受容する力」「表現・コミュニケーション力」「意思決定力」の3つの力こそが、これからの社会の中で生きていく生徒たちにとって義務教育の終了段階でつけておく力であると考えた。

この3つの力は、学習活動全体で身につけるものではあるが、「技術科」として担うことができる役割としては以下のように考えている。

「多元的価値観を受容する力」を養うために、例えば、授業で製作した作品の完成後に、相互評価・自己評価、メッセージカードなどを活用することが考えられる。

「表現・コミュニケーション力」を養うために、例えば、コンピュータを活用した情報の収集と発信や電子メールを活用した情報通信のやりとりが考えられる。

「意思決定力」を養うために、例えば、ものづくりにおいて、自分で製作したいものを考え構想し製作をする中での機能・構造、材料選び、加工法など一連の意思選択などが考えられる。

今年度はこれら3つの力のうち「多元的価値観を受容する力」を養うためにはどのような自己評価・

相互評価・メッセージカードを実施することが効果的であるかを考え、次のような研究を進めてきた。

Ⅱ. 学習指導要領の目標を達成するための評価

本年度から完全実施されている中学校学習指導要領は、基礎的・基本的な内容によって構成され、その確実な実践を通して、自ら学び、自ら考えるなどの「生きる力」の育成を基本的なねらいとしている。

これまでの知識・理解・技能といった学力のみを柱とした学習では「生きる力」を十分に身につけさせることは難しいと考えられる。生徒が自ら知識・理解・技能について学び、自ら考え、主体的に解決しようとする態度や能力を育てることが、「生きる力」を身に付けさせることにつながると考えられる。そのためには図1の「技術・術家庭科における指導と評価」に書かれているような考えを常にもち、日々の授業を実践していくことが大切であると考え。

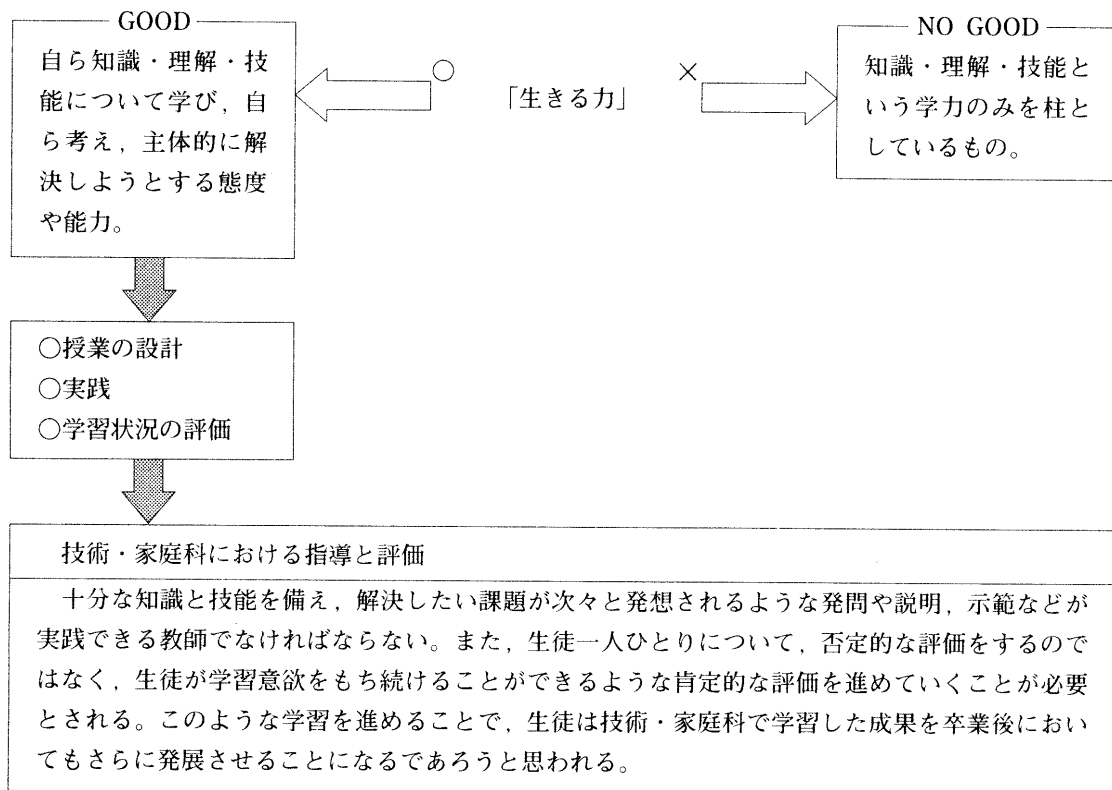


図1 技術・家庭科における指導と評価の考え方

Ⅲ. 本校技術科の観点別評価についての考え方

1 「相対評価」から「絶対評価」へ

これまでの学校教育の中で、実施されてきた評価は「集団準拠評価」といわれるものであり、生徒一人ひとりを集団の中に位置づけるために、得点分布や平均値で生徒を評価するという形や生徒たちを相互に比較して評価してきた。このことは相対評価にあたるものである。

それに対して、これから実践される「目標準拠評価」は、一人ひとりの生徒の目標の達成状況（実現の状況）を他の生徒と比較することなく評価することになる。

また、目標といっても、抽象的なものではなく、具体的な学習内容や学習活動について達成できた

かどうか判断できるものでなくてはならない。

ものづくりなど、技術的な活動が家庭などで行われなくなっている現状を考慮すると生徒は、学習を始めた当初は、一般にCの段階であるが、本校の技術科では、それをいかにしてAやBにするかという課題に取り組むとともに、Cの評価になった生徒については、それで指導及び評価が終わるのではなく、個別に指導するなどの手だてをすることが大切である。という基本方針をとっている。すなわち、評価基準を設定していく時に、Cにならない手だてを考え、指導していくことが重要であると考えている。

IV. メッセージカードを取り入れた相互評価の授業実践例

1 授業実践の目的

本研究は、本校の定める基礎・基本の3つの力の中の「多元的価値観を受容する力」を生徒に身につけさせる方法の一つとして、生徒が制作した作品をお互いに評価し合ったり、メッセージカードを書くことで、「多元的価値観を受容する力」をお互いに身につける事ができるのではと考え、その試みとして実践を行った。



図2 授業の様子(相互評価をしているところ)

2 授業実践の内容

第2学年の「情報とコンピュータ」の学習で実践した。この学年は、第1学年時に「技術とものづくり」を履修している。その学習題材として、一枚の集成材を取り扱った「身の回りの物が整理できるものを作ろう」の学習に取り組んだ。第1学年時に製作した作品をコンピュータを使って紹介する「作品紹介づくり」へとつなげていった。

(1)相互評価表とメッセージカードの活用

生徒は、一人ひとりがそれぞれ作品の構想から計画を立て、レイアウトを考え作品を完成させた後、生徒間で相互に評価をし合っている。評価を行うときには、評価の観点を設定し、その観点ごとに5段階の評価をし合う。その際、作品の一つひとつに観点別評価とは別に、メッセージカードという形で作品について文章で、「作品の素晴らしいところ」と「作品のあと一步のところ」(肯定的評価)についてお互いに評価をし合う。この時、「あと一步のところ」に記入する場合には、受け取った人がこれからの学習の参考になり、やる気が出るような文章を書くように指導する。そのことで次の作品制作への意欲づけにつながると考えた。

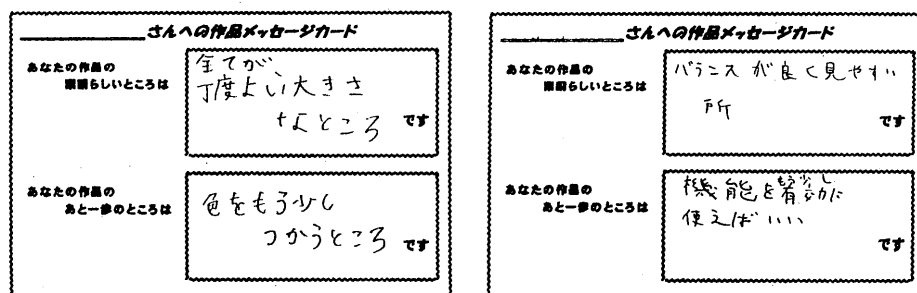


図3 生徒が記入したメッセージカード

(2)相互評価のまとめ

メッセージカードを受け取った生徒は、そのカードに書かれているアドバイスをしながら項目ごとにまとめを行って、「素晴らしいところ」と「あと一步のところ」を別々にまとめる。このことにより、自分の作品のどのようなところがみんなから評価されているのかがよくわかり、どこが良かったのかやどのようなところを改善すればよいのかが具体的にわかるようである。最後に「今後の学習や生活に生かされるところ」を書かせることで、次への意欲につながるように配慮する。

(3)自己評価表

生徒一人ひとりが学習目標に対して、どのレベルまで到達しているか、個々の生徒の学習状況を把握することはとても重要なことである。そのためには、毎時間の活動の様子を観察すると同時に、毎時間の活動の記録や気づき、生徒の到達度やつまずきなどを把握することが重要となり、指導や評価にあたっては自己評価表を活用する。

また、この用紙を記入させることは、その日の授業の目標やその時間に自分が学習して「わかったこと」や「できたこと」・「できなかったこと」をはっきりと確認させ、次の授業への学習意欲を結びつけることを狙いとしている。

V. 生徒の受けとめ方

この研究の考察をするための資料の一つとして、評価についてのアンケート調査をおこなってみた。調査は39名（2年生）の生徒を対象に実施した。アンケートの回答方法は、「とてもそう思う（5ポイント）」から「全くそう思わない（1ポイント）」まで、5段階評価でおこなった。質問項目は、メッセージカードについては5項目、相互評価については4項目、自己評価表については9項目あり、全部で18項目とした。各質問の結果の値は、全生徒の平均値とした。また、それぞれのアンケートについての自由記述の欄を設けた。

情報とコンピュータ

相互評価をお互いに行いました。各自がみんなからのメッセージカードを受け取ったと思います。その中には「素晴らしいところ」と「あと一步のところ」を書いてもらいました。これを読んで、自分の作品をふり返りましょう。

2年2組40番 佐藤

今日のテーマ 作品紹介

前作の作品の「素晴らしいところ」と「あと一步のところ」では何か？
文章がわかりやすいこと・全体のバランスがよいことを書いてくれた人が多かったです。自分自身も、文章には力を入れたので「自信がなかった」。

前作の作品の「あと一步のところ」と「あと一步のところ」では何か？
印刷後、ものすごく後悔したことは、全体的に小さいこと、黒色が自立したこと。皆にも指摘されました。

今後の学習や生活に生かされるところは？
ディスプレイの中の文字と、印刷をした後の文字は大きさが全然違うことです。絶対に、次の機会には小さくするぞ!!

図4 相互評価のまとめ用紙（作品のふり返り）

情報とコンピュータの自己評価表

NO. 3

授業日 12月5日

2年1組 佐藤 名前

1 今日の日課
作品紹介づくり Part 2

2 今日の学習でわかったこと
文字の大きさ、色、字体的な変更。上書き保存の仕方。

3 今日の学習でできたこと
前作のレイアウトをもとに、少し直しをしながら、見やすい作品紹介づくりを作ることができた。

4 うまくいかなかったこと
文章を入れたとき、たてがずりになり、写真があったりなかった。 考えられる理由

・今日の授業は楽しかったか
とても楽しかった 楽しかった どちらでもない あまりでなかった 全くでなかった

・今日の授業は理解のわくことがたくさんありましたか
とてもあった あった どちらでもない なかった 全くなかった

・別の人や周囲の人と協力できましたか
とてもできた できた どちらでもない あまりでなかった 全くでなかった

実技テストで今日の操作を確認することができた。見やすい作品紹介づくりを作れるように工夫してきました。

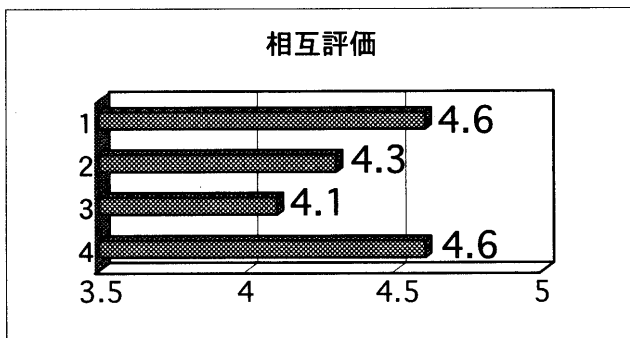
図5 毎時間の自己評価表（生徒が記入したもの）

1 相互評価について

相互評価については、図6のアンケート結果を見てみると、「相互評価でお互いに作品を見ることで、参考になるようになりましたか?」という質問に対しては、4.6ポイントという結果が得られた。相互評価をお互いにし合うことで、他の人の作品をじっくりと見ることができる。その事により、いろいろな機能の使い方やレイアウト・文字の大きさなど今後自分が作品を制作するときの参考になることを考えているという意識が生徒の中には多く見られた。また、「相互評価をし合うことで、友だちの作品の良さに気づく事ができるようになりましたか?」という質問に対しての結果も、4.6ポイントであった。相互評価をし合うことで友だちの作品の良さに気づくことができるようである。これらのことは、生徒のアンケートの自由記述の中にも見られ。「相互評価を行うことによって、他の人の作品の良さなど、パッと見たときよりも見つけることができたし、自己評価をすることで、最初はあまり気にしていなかったところからも、良い点・悪い点が出てきたので、参考になりました。」という内容を書いている生徒が多く見られた。

一方、「相互評価をし合うことで、自分の作品の良さに気づく事ができるようになりましたか?」という質問に対しては、4.1ポイントという少し低い結果にとどまった。相互評価をし合うことでは、自分の作品の良さについてはあまり気づかないようである。

また、生徒の自由記述の中には、「他の人の作品の評価で、感心する場面も多くあって参考になった。」「アイデアの幅が広がった。」というものもあり、友だちの作品を多く見ることで、自分の意欲につなげている生徒も見うけられた。



1. 相互評価でお互いに作品を見ることで、参考になるようになりましたか?
2. 相互評価をし合うことで、次回の作品制作に意欲がわくようになりましたか?
3. 相互評価をし合うことで、自分の作品の良さに気づく事ができるようになりましたか?
4. 相互評価をし合うことで、友だちの作品の良さに気づく事ができるようになりましたか?

図6 相互評価後のアンケート結果

2 メッセージカードについて

メッセージカードについては、図7のような結果が得られた。これらから、質問の1や3のような「作品の素晴らしいところ」が書いてあるメッセージよりも、質問の2や4のような「作品の今一步のところ」が書いてあるメッセージの方が、作品のふり返りや次の作品への意欲の面で効果的であることがわかる。このことは、作品が完成し、提出したらそれで終わりというこれまでの方法では意識できない生徒の反応であった。

また、「カードを記入することで、友だちの作品の良さに気づく事ができるようになりましたか?」という質問に対しては、4.6ポイントという結果が表れているように、メッセージカードの記入をすることで、相互評価の実施同様、友だちの作品の良さに気づく生徒が多く見られた。

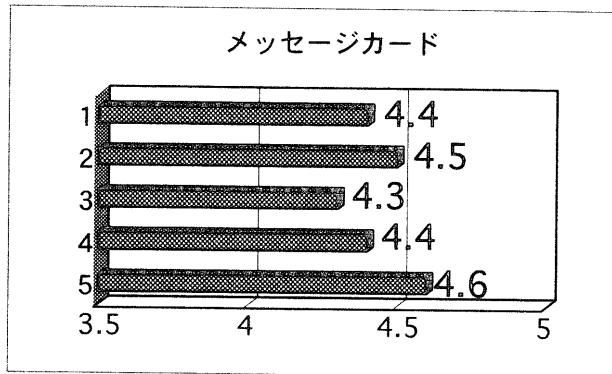


図7 メッセージカード記入後のアンケート結果

1. カードの素晴らしいところを見ることができ、作品をふり返ることができるようになりましたか？
2. カードの「あと一步のところ」を見ることで、作品をふり返ることができるようになりましたか？
3. カードの素晴らしいところを見ることができ、次回の作品制作に意欲がわくようになりましたか？
4. カードの「あと一步のところ」を見ることで、次回の作品制作に意欲がわくようになりましたか？
5. カードを記入することで、友だちの作品の良さ気づくことができましたか？

3 自己評価表の記入について

自己評価表についてのアンケート結果を見ると、図8のように、「自分の学習をふり返ることができるようになりましたか？」という質問に対して、4.5ポイントという結果となった。毎時間の授業の終了時に記入させることでその時間をふり返ることができていると考えられる。

質問の4・5・6については、毎時間の学習内容を確認させ、「自分が今日の授業の内容を理解できているか」や「自分はどこができなかったのか」をはっきりと認識させることで、次時の学習への意欲づくりやきっかけづくりになることを目指したか、どの質問に対しても4.3~4.4ポイント程度であった。さらに、質問2の「次の技術の授業に対する意欲が高まるようになりましたか？」については、4.2ポイントと少し低めで、期待していた結果は得られなかった。

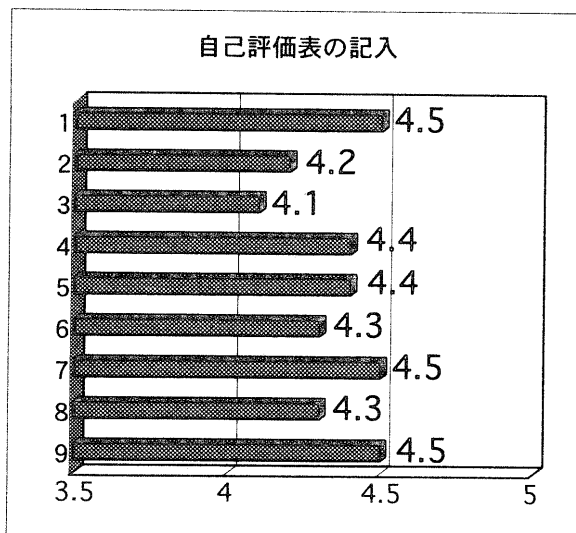


図8 自己評価表の記入についてのアンケート結果

1. 自分の学習をふり返ることができるようになりましたか？
2. 次の技術の授業に対する意欲が高まるようになりましたか？
3. その日の技術の授業の目標をもって、学習に望むことができるようになりましたか？
4. その日の技術の授業で、「学習した内容」が確認できるようになりましたか？
5. その日の技術の授業で、「できたこと」が確認できるようになりましたか？
6. その日の技術の授業で、「うまくいかなかったこと」が確認できるようになりましたか？
7. 楽しく学習や制作に取り組む事ができるようになりましたか？
8. 意欲的に学習や制作に取り組む事ができるようになりましたか？
9. 周囲の人と協力して、学習や制作に取り組む事ができるようになりましたか？

相互評価について

- ◇自分の作品を客観的に見ることができる。
- ◇自己評価だけでは気づかなかったことが相互評価で気が付いた。
- ◇相互評価を行うことによって、他の人の作品の良さなど、パッと見たときよりも見つけることが

できたし、自己評価をすることで、最初はあまり気にしていなかったところからも、良い点・悪い点が出てきたので、参考になりました。

◇相互評価では、みんなアドバイスや良かったところをたくさん書いてくれたので、次回への意欲がわいた。

◇他の人の作品の評価で、感心する場面もあって参考になる事が多くあった。アイディアの幅が広がったと思う。

◇今までは他の人の作品を見る事がなかったけど、今回作品紹介をして自分にないアイディアがあったりして、技術に関心がわきました。

メッセージカードについて

◇自分と相手の感じ方が違って、自分を客観的に見るが必要だと思うようになった。

◇一生懸命作ったものをほめてもらったり、注意してもらえるということは、とてもうれしいことだと思いました。

◇同じ所についての指摘を多く受けたので、今回は直せるようにしたい。指摘し合うという点ではとても効果的だと思う。人の作品を見ることで、人の工夫と自分の違いが分かるようになった。

◇メッセージカードをそれぞれ評価することによって、自分では気がつかなかったところを他の人が気づいていたりして、自分の作品のあと一歩のところがよく分かった。

◇自己評価よりくわしく、「良かったところ」「悪かったところ」が分かるので、どうしたらもっと良くなるかが理解しやすくなった。

自己評価表について

◇その日のふり返りができるようになり、「できなかったこと」を思い出せるようになってよかった。

◇自己評価表を書くことによりその日の授業の内容が再確認できるので良いと思う。

◇ふり返りを文字にして書く事で、その日行った事や自分の良かった点、次に活かす点に分かるようになった。(今まで授業をふり返ることがあまりなかったので)

◇反省などをする習慣がついた。ふり返りをする方が次回に向けてがんばれるので今後もやってほしい。

◇自分でも、自分の態度や意欲について気づくことができた。

◇授業のふり返りをするようになって、反省をして自戒への課題を見つけることができて、よりよい授業をする意欲がわく。

資料1 生徒の自由記述

VI. おわりに

今回の実践を通して試みた相互評価やメッセージカードによって生徒は、お互いを認め合い、互いに成長しようとしていたという実態がうかがえた。このことは、「多元的価値観を受容する力」を育てる一

つの方法として効果的であると考えられる。

ただし、類似の相互評価やメッセージカードを取り入れるという実践は多くの学校でも見られる。本校が目指す力の育成を実現させるためには、授業計画から評価までの実践に十分な配慮が必要である。

今後、さらにこの取り組みを継続し研究しながら、同時に身につけさせたい「表現・コミュニケーション力」や「意思決定力」を技術・家庭科の授業の中でどう育てていくか研究を重ねていきたい。

※本研究は、間田泰弘教授（広島大学大学院教育学研究科）のご指導，助言をいただいた。ここに記して謝意を表す。

引用・参考文献

文部科学省教育課程課，「中等教育資料」，平成14年7月号，2002

文部省，中学校学習指導要領（平成10年12月）解説 技術・家庭科編，大日本図書，1999.